モノグラフ

選ばれた写真

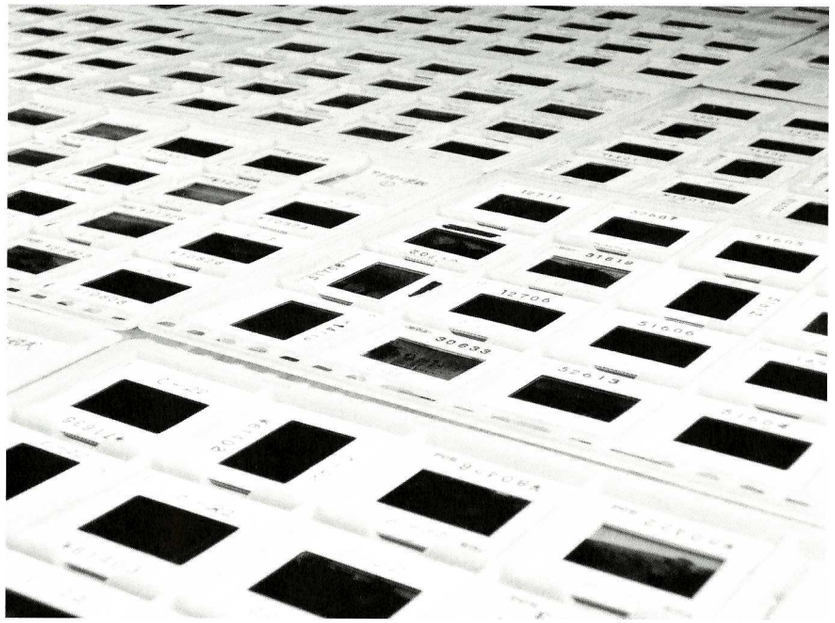
木田 歩（きだ あゆみ）
名古屋大学大学院人間情報学研究科

博物館とはモノを収集し、保存し、そして展示する場である、と当たり前のように思っていたわたしが、そもそも、モノを集めるとはどういうことなのだろうと考え込むことになったのは、あるモノとの出合いからである。

一九四九年に人類学民族学研究所の資料陳列室として誕生した南山大学人類学博物館は、調査研究の結果を公開することを目的としていたため、さまざまな調査に基づくコレクションを所蔵している。そのひとつが、二〇〇〇年に寄贈された「上智大学西北タイ歴史・文化調査団」コレクションである。これは、東南アジア大陸部の山地に住むミエン（ヤオ）族やモン（ミャオ）族などといった少数民族を対象に、歴史民族学的調査をおこなって集められた資料である。この調査は上智大学白鳥芳郎教授を団長に、一九六九～一九七四年まで三回にわたって実施された。そしてこの調査団の収集資料の一部が、標本資料として民博にも収蔵展示されていることが、最近の調査でわかってきた。

衣服や装身具を中心とした民博の所蔵資料とくらべると、人類学博物館の所蔵資料は、その量もさることながら、農具や背負い籠といった日常的な生活用具から、調査団員が撮影した映像や調査団員が作成した台帳や地図まで、非常に多岐にわたることが大きな特徴である。そのなかで興味を引いたのは、調査団員が撮影した写真である。厳密にいうと、それらのあり方である。

大人二人で抱えてやっと動かせる頑丈なグレーのキャビネットの、鍵付きの重たい扉を開けると、五〇枚ほどのスライドシートが等間隔の溝に綺麗にびっしり並んでいる。そのシートをとり出してみると、マウントに番号が付された、三五ミリのカラースライドが行儀よく収まっている。少し気になるのは、それらが番号順に並んでいないことである。その一枚をとり外して見ると、まるでその住処（すみか）が決められているように、シートのコマにもマウントと同じ番号が記されている。よく見ると、シートそのものにも別の番号が与えられ、小さなラベルには、そのシートにある写真たちの内容と思われるタイトルが簡明に書かれている。こうしたキャビネットが他にも五つある。



調査団員が撮影した35ミリカラースライドの一部
南山大学人類学博物館所蔵

撮影されたスライドは、このキャビネット以外にも、いくつかの種類のスライドボックスに、やはりシートに入れられて整理されているものもあれば、小さなダンボールに無造作に詰め込まれ、何があるのか判然としないものもある。数にすると、一万枚以上にもおよぶ。

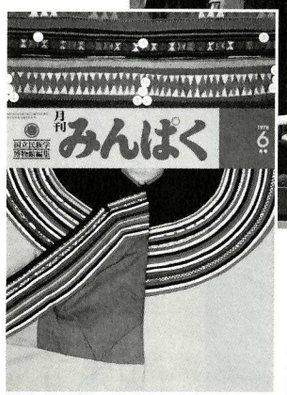
調査団員が作ったスライドの台帳をめくると、撮影年月日や場所、その内容といった情報が一コマごとに記され、番号が撮影者ごとに付けられている。ここから、フィルムがまずは撮影者ごとに分類整理され、再度、被写体の内容ごとに分類され保管されていったことがわかる。今でこそ資料の組み換えは容易にできるであろうが、三〇年前となれば、途方もない時間を要する作業であったことが想像できよう。そしてキャビネットの写真たちは、大量の写真のなかから、そうした作業を経て選ばれたモノとして、調査団員が特に価値を置いたモノだったのである。こうして、撮影された写真だけでなく、それらのありようを眺めてみることで、モノを収集するとは、ただため込むこととは異なる、感性や価値観といった思考のもと集められ選択されていく、文化的営みであることを改めて実感した。

写真は人類学とほぼ同時期に生まれ、その歴史を共有しているといわれるが、われわれがどのように人をとらえてきたのかを視覚的に示すモノとして、近年、注目されはじめている。

そして、記録するための、あるいはことばを補うためのモノとしてではなく、われわれがそれらをいかに経験してきたのかをとらえるためのモノとして写真を位置付けて見ると、けっして写真だけが重要なのではない。どのように撮影され、どういったフィルムを使い、どういった編集作業がおこなわれたのか。こうした情報はフレームの外にあるモノとして見過ごされがちである。しかし、そうした側面にも関心を寄せることで、モノと人間のかかわり合いの複雑な様相を語ることができるのである。

モノを収集するとは何か。それをさまざまな過去のコレクションから深く探ってみることは、膨大な量の情報が溢れ、記録媒体の軽量化が進み、手軽に編集することができる現在に生きるわれわれにとってこそ、意味があるのではないだろうか。

民博の東南アジアコーナーの一部として
展示されている調査団の集めたモノ



『月刊みんぱく』（1978年6月号）の表紙を
飾ったリス族とアカ族の女性衣服